第22号　平成22年11月10日　発行

東京冀北会会報

東京冀北

第22号

東京掛中・掛西同窓会会報

今、有徳って何だろう

東京冀北会会長　河原崎　守彦（高九回卒）

郷里の静岡県では、石川前知事の時代以降、富国有徳が県政の基本理念とされています。この言葉は、川勝現知事の発案による言葉だとのことですし、私も、含蓄のある良い言葉だと思っているのですが、富国についてはある程度わかり易いとしても、有徳の意味するところを明らかにすることは、容易でないように思われます。

古代では、ギリシャのプラトンの四元徳（智恵、勇気、節制、正義）や、儒教の五倫（孝行、忠節、和順、友愛、信義）、五常（仁、義、礼、智、信）など有名でしょうし、わが国でも古代以来、清き明き心、正直（せいちょく）の心、誠など重んじられてきたと言われており、二宮尊徳は勤労、分度、推譲を重んじたとされています。更に近年において、梅原猛氏が掲げている人生をより良く生きるための徳目についてみますと、自利のための努力と創造、人間関係のための愛と信、永続絶対なものに対して感謝と哀れみが重要であると述べています。（因みに新倫理学辞典の徳目の項には、七十八の徳目があります）

以上いずれも重要な徳目だと思うのですが、同時に幾つかの疑問もわきます。まずこれ等の徳目は何のために必要とされるのだろうか。その徳目は時代や社会の変化とともに変わるものではないだろうか。そして徳目は、特にわが国では心の持ち方に関心があり、為すべき正しい行為とは何かについて答えていないのではないか等々です。

これ等の点即ち道徳は何のために必要かについて、ヨーロッパでは

第21回東京冀北会総会・懇親会会計報告
(2009.11.5)

出席者
- 会員　97名
- 来賓　3名（掛川西高等学校校長他2名）
- 計　100名

有料出席者　95名［元応援団1名は年会費のみ徴収とした。］
当日年会費納入　67名（201,000円）　一般会計　収入扱い
祝儀　3件（掛川西高校長、同窓会副会長他1名）
寄贈品　3件　赤岩　覚様（高10）、岩井是道様（高12）
竹原繁男様（高16）

収入の部

総会参加費（7,000円×95名）	665,000
祝儀	30,000
計	695,000円(A)

支出の部

会場費（文祥堂イベントホール・看板費含む）	169,523
宴会費（サンミ高松）	450,420
来賓お礼・車代（銀座松屋他）	38,400
総会運営費（年次幹事反省会費）	30,000
福引景品代	20,105
雑費（振込手数料、備品運搬費等）	3,690
計	712,138円(B)

差　収　入 (A) 695,000 － (B) 712,138 ＝ △17,138円
（一般会計より支出）

平成21年11月30日
東京冀北会　事務局長　山﨑　進

平成21年度東京冀北会収支報告
平成21年4月1日～平成22年3月31日

(収入)	前年度繰越金	414,200
	年会費（郵便振替分）	509,880（189名）
	〃　（現金納入分）	201,000（67名）
	総会懇親会参加費	665,000（95名）
	役員・幹事会費（個人負担）	135,000（33名）
	雑収入（祝儀・預金利息）	34,315
	計	2,019,395円 (A)
(支出)	印刷費（総会通知一式、会報、宛名シール、封入作業費他）	461,370
	総会通知郵送費（1,488通）	119,040
	総会返信後納費（343通）	22,295 ※1
	総会・懇親会費	712,138
	会合費（幹事会・役員会等）	195,746 ※2
	出張・祝儀費（掛川）	51,000
	通信物流費（郵便、宅配便等）	53,190
	事務費（事務用品、管理費等）	59,959
	計	1,674,738円 (B)

（収支残高）(A － B) ＝ 344,657円（次年度繰越金）

※1：総会出欠返信料受取人払い。
※2：役員・幹事会は個人負担135,000円（@4,000×延33名他雑収）を徴収。

会計監査　遠藤　義昭（高16回卒）
会計監査　森田　重敏（高21回卒）

注：総会有料出席者は会員95名、来賓3名、元応援団員1名でした。

編集後記

最近川柳にはまっています。帰省の際こんな句を作ってみました。

"故郷の木造駅にほっとする"

子供の頃から鉄道大好き人間だった小生は、遊び場が駅でした。仲の良かった友人が掛川駅近くの国鉄官舎に住んでいたため、遊びがてら駅に行き、二俣線の蒸気機関車の方向転換する転車台でその光景を見るのが好きでした。ついでに東海道線を行き来する、特急「つばめ」や「はと」の展望車の乗客に手を振るのが楽しみでした。薄暗くなるまで友人と駅の構内で遊ぶのが日課でした。

その木造駅舎の存続が危ぶまれているとのことでショックを受けています。喜寿を迎える品格と風格のある駅舎の存続を望みたいものです。新幹線唯一の木造駅舎を昭和の文化遺産「掛川の顔」として後世に残したいものです。

（Y記）

発行日　平成二十二年十一月十日
発行者　河原崎　守彦
発　行　東京冀北会事務局
印　刷　㈱文洋社

校歌

作詞　藤井金吾
作曲　塙　福寿

一、岩根こごしき天守台
その麓にぞわが校は
基定めて逆川の
栄え行くこそ楽しけれ

二、雨降り嵐すさぶとも
指してや行かむ小笠山
希望の懸を射るまでは
めげず撓まず屈折れず

六、やがてまことの勲なし
誉れは栄ゆる百々錦
飾りて花の色そへよ
大和島根の山桜

様々な議論があり、社会契約説（自然状態から逃れるための社会契約として必要とみる説）、功利主義説（最大多数の最大幸福のために必要とみる説）など良く聞くところですが、いずれの場合も、道徳の対象が個人であると同時に社会を視野に入れ、良い社会を創るために何をなすべきかに関心があるように思います。私流に解釈すれば、道徳は、良い人とは如何なる性格の人かという意味で個人の問題であるけれども、同時に社会との関係において、何をなすべきかの客観的基準として更に重要であるということかと思います。

そこで、現在の日本は、どのような状況なのでしょうか。戦後の悲惨な状態から出発し、経済大国を目指して総力を挙げて努力した結果、世界第二位の経済大国となりました（今年中には、その地位は中国に譲ることになりそうですが）。然し、わが国がようやく目標を達しバブルに浮かれていた時に、世界は冷戦の終結に伴う大競争の時代に入り、一方わが国はバブルが崩壊して長い停滞の時代に入りました。しかも、これからは人口の減少と老齢化が確実に進み、経済の縮小圧力が増すことが危惧されています。繰り返しになりますが、わが国は、新たな目標の下に、国民が一致してグローバル競争に打ち克ち、人口の減少と老齢化を克服して行かなければ、現在のささやかな豊かさも享受できなくなるのではないかと心配されるのです。

このような時代、社会において必要とされる徳とは何でしょうか。具体的な徳目とは少し離れるかと思いますが、私の思いつくところを記してみたいと思います。第一は、自己の確立と個性の尊重です。とかくわが国では空気とか人並みを重んじがちであり、一方利己主義に走る面も見受けられますが、他人依存を排した健全な自主自律と自己責任の精神は、社会生活の基本的条件のように思います。第二は、構想力とチャレンジ精神です。わが国のようにある程度豊かになった社会では、既得権を守ろうとする力が強まり、これが文明衰退の原因であることは歴史の教えるところですが、これを打破するためには、構想力（目標設定能力とシミュレーション能力）とチャレンジ精神によって新しい時代を切り開き、人々の関心を過去から未来へ変えて行くことが必要だろうと思います。第三は、論理の重視です。特に人を説得する際に必要になると思うのですが、現実を踏まえない言葉上の争いや感情に流された議論は空論になり易く、実りの少ないものです。現実的で論理的な根拠を示すことによって初めて、当事者のみならず背後の関係者も納得することになると思うのです。第四は軽重の判断をし、重要事から取り掛かることです。わが国では頭の良い人が多いためか、末梢的なところまで完璧を求め、そのため肝心なところが疎かになる傾向なきにしもあらずと思われます。塩野七生女史も、文明の衰退期には、重要な問題も論争を重ねている内にその本質を忘れてしまう傾向にあると述べています。本質的なものを摑む洞察力と、それを実施に移す集中力が必要になると思います。

以上、現代において望まれる、徳目の活用される場面あるいはその活用の方向性というような点をならべましたが、我々一人ひとりがこのような観点に合う徳を身につけ、その徳を用いて成果を上げることによって、内向き過去向きの指向を越えて発展する社会を創り出して行くことが肝要であると思うのです。更に付け加えますと、現在必要とされている有徳は、富国にふさわしい徳を身に付けよう（衣食足って礼節を知る）とか、技術優位の中にあって人間性を回復させようとかいうようなゆとりのあるものではなく、有徳を磨くことによって、着実に富国を築いていこうという性格のものであると思います。生噛りの知識に加えて根拠の乏しい独断的な考えを並べ、お目ざわりかとは思いますが、心の中の有徳にとどまらず、良い社会を創るために役に立つ有徳であって欲しいという私の願いを、少しでもお汲み取りいただければ幸いです。

了

隠居事始め

前静岡県知事　石川嘉延（高十一回卒）

昨年六月半ば、静岡県知事を退任して、既に一年半近く経ってしまいましたが、東京冀北会の皆様に、この誌面をお借りして、四期十六年弱の間の格別のご支援と折に触れての適確なご教導に心から厚く御礼申し上げます。

知事退任後の住居は、郷里旧大東町ではなく、縁あって藤枝に定めました。現役時代とは違った、ゆっくりとした時の流れの中で元気で暮らしております。小人閑居して不善を為してはいけないと思い、世の中の動向に関心を持ち続けようと暮らしております。

その思いで昨今の日本を眺めておりますと、「日本はこの先大丈夫かな」と心配になることが次々と生じておるように感じられてなりません。それらのうちここで、国の存立そのものにかゝると思われる問題について一つの事例を通して愚見を述べてみます。

それは、沖縄の普天間基地の移設問題です。これは、十数年前から自民党政権下で取り組まれ、紆余曲折を経てようやく具体的解決に向けて第一歩を踏み出すばかりになっていた昨年秋、政権交代によって誕生した民主党連立政権がこれを白紙に戻し、迷走を重ねた結果、何時、どのように解決されるか五里霧中状態になってしまいました。この過程で、我が国の防衛安全保障の観点から様々な議論が交わされ、その結果、防衛安全保障、特に軍事的側面について国民的関心の高まりと認識の深化が見られたことは不幸中の幸いだったと思います。しかし、私は、この問題の孕む、もう一つの重要な点が見過ごされてしまったことに大きな危惧を覚えました。

それは、沖縄独立論です。現在の日本、特に沖縄以外の地域の人々は、そんなことは考えてもみなかったということでしょう。

沖縄は何時から日本だったでしょう。そんな遠い昔ではありません。明治維新以降のことです。それ以前の沖縄には、れっきとした「琉球王朝」が存在し、中国の歴代王朝と日本（薩摩藩）の双方に朝貢しており、現在の中国は、いつ何時、沖縄は琉球で日本領土ではなく中国領土だと言い出さないとも限りません。現に中国の中学生の教科書の中に、沖縄を中国領とした地図を載せているぐらいですから。

私は、かねてより沖縄の一部に「沖縄独立論」があると閃聞しておりましたが、今回の普天間問題を巡る民主党連立政権の沖縄の人々の心を弄び、傷つけるような怪しからぬ対応によって、この議論が勢いを増してくることを懸念します。

現在の我が国法制下で、沖縄県民が平穏裏に独立を宣言（例えば、県議会で独立の是否を問う県民投票条例を制定し、これによる投票で県民の過半数の賛成を基に、沖縄国政府の樹立と独立宣言）をした場合、日本政府にこれを食い止める手立てはありません。もっとも、現在の国際法に関する学説では、日本がこれを認めないときには、沖縄の独立は有効には成立しないとされています。しかし、現実問題としては、日本以外の二つ以上の国、例えば、中国と北朝鮮がこれを承認すると、国際社会に独立国として存在し始めるなど極めて厄介な事態に立ち至ることになります。これは、古くは中国と台湾、近くはセルビアとコソボの例を見れば、容易に想像がつきます。

現在の国際情勢の中で、こんなことは荒唐無稽と思われるかも知れませんが、沖縄が東アジアの中で地政学的に極めて微妙な複雑な位置にあるだけに、今後の国際情勢、即ち、アメリカの国力の減退と中国

の著しい抬頭、海洋資源の重要性増大などに加えて、先に述べた沖縄の歴史をを考えると、我が国は沖縄独立論が現実化しないためのあらゆる方策を真剣に考え、取り組む必要があります。

今から五年程前、国民保護法制定の頃ですが、ある危機管理の専門家から次のようなことを伺いました。それは「北朝鮮の金正日政権が崩壊した場合、他の独裁政権崩壊例に照らして、百万人位の亡命者が発生し、そのうち十万人位が日本海を渡って日本の沿岸にやってくる可能性がある。その場合、亡命者は治安上、一ヶ所当たり五百人程度とし、自衛隊員が二十四時間警備するとの前提で必要な場所の確保の目途をつけ、自衛隊員の訓練を行うべし」というものであった。私は、自治体の長としての感覚で重要な指摘と受け止め、内閣府の国民保護法制担当の責任者にこの旨を伝えたところ、重要ですねとは同意されたものの、その後具体的手立てが進んだ様子はありません。

この経験に照らしても、沖縄独立問題への対処など思いつかないか、思いついても何もしないで放置されることは必定でしょう。

今日、危機管理についての国民の認識は、以前よりは高まったとは言え、未だしの思いがします。

私は、余生をこれまでの経験を踏まえながら、その時々感じたことを発信し、若い人から「あの年寄りの言うことをも聞いて見よう」といわれる「隅におけない隠居」を目指して生きて行きたいと思っております。

女が仕事をするということ

大角幸枝　（高十六回卒）

私は小さい頃から何事によらず「作ること」が好きで、図画工作は最も得意な科目であった。大学時代に金工の世界を知ったが、これがライフワークになるとは考えていなかった。しかし、この道四十年を経て、物作りは生活の原点という考えが私の中に定着している。

小学生の頃、よく先生に「大きくなったら何になりたいか？」と質問された。田舎のこととて、世の中にどんな職業があるか考えられもしない。私は親や親類縁者から得る知識のみで「先生、学者、絵描き」などと答えたが、その頃、大多数の女の子は「お嫁さんになりたい」と答えていた。私にはこの答は全く不可解だった。お嫁さんなんて誰でもいつかなるもので、わざわざなりたいなんて言うものじゃない。自分は何によって身を立てるか、ということの方が重要で、結婚などというものは、その途中で遭遇する節目にすぎないことだと、その後もずっと信じて疑わなかった。今思うと、少なくとも当時、これは全く男の考えることであった。お嫁さんになりたい女の子達は、そのこと一途に精魂傾け、「幸せな結婚」をして遠ざかり、当然の帰結として私はひとりで仕事を続ける人生を、選ぶともなく歩んできた。もちろん私のような不器用な女ばかりではない。仕事も家庭も立派にこなしている賢い人達も多い。

男社会で仕事をする女は、常に二重の人格を持たされている。金工というハードな仕事の性質上、私の仕事仲間は圧倒的に男性が多い。

例えばお宅に訪ねると奥様が出迎えてくれる。お茶を出して引っ込んでしまわれると、あとは仕事の話、私は同性である奥様とも話したいと思うのだが、そう願えたところで立場は主婦と仕事仲間、私は主人側の世界の人間であって、同性としての連帯感を持てる接点がないのである。女の私が好きな仕事を続け、少しは認めてもらえるようになったことを感心されたり、淡ましがられたりすることがある。しかし私が独身であることを知ると、「やっぱりねえ。」という納得と安堵の入り交じった表情を浮かべる主婦は多い。このようにして男の世界に分け入る女と、そうでない女はいつも分断されるのだ。

私を今日まで、仕事をする人間に育ててくれたのは皆、男性である。もしも私が亭主持ちだったら、男達はこんなに親切に心を込めて、危なっかしい私を導いてくれただろうか。独りでいることの意味を深く考えさせられる時がある。身の回りのことにかまける必要のない男性には考えもつかないことであろう。そのかわり男性には家族を背負っているという大苦労があることを承知の上でも、何か割り切れないものを感じてしまう。

仕事に使う工具は専門店で購入するが、急に必要なものがあったりすると、近くの金物屋で買ってすませている。こういう店は男性の客が多い。始めの頃、店の主人は私が買い物に訪れると、女のくせに妙なものを買いに来る奴だ、というような顔をして、後から入ってきた男性客の応対を先にしたりして、なかなか取り合ってくれなかった。しかし、何年もつきあっているうちに、私の買い物が日曜大工道具の域を超えているのがわかると、ついに「あんた、女にしとくのはもったいないような人だねえ。」と言うようになった。これが男の褒め言葉である。鍛金の帥匠、関谷四郎先生が生前、私のことを「顔はまずいが仕事は巧い。」と評されたと伝え聞いて複雑な思いをさせられた。やはり女は顔が大事か。

戦後の教育はまずい面も多々あるが、最近の働く女性の環境に関してのみ見れば、まだ不十分とは言え格段の進歩があったと言える。私が大学を卒業する頃、「就職を考えるより、自分が本当にしたいことをやっている男と結婚する方が幸せだよ。」と大まじめで助言して下さる教授がいた。今、女子学生たちは一〇〇パーセント就職を目指す。一生の仕事を持とうとがんばる。「男勝り」、「花嫁修業」というような言葉が死語になった今、昔に戻って欲しいとは思わない。先人の開拓した道を閉ざしてはならない。

昨今は伝統工芸の後継者不足が深刻だが、一方ではいろいろな分野で女性の後継者が育ちつつある。女性は男性に比べて社会的立場や制約がなく、自由に仕事を考えられる時代になった。仕事か家庭か、などと気負い込んだりせずとも、「就活」、「婚活」共に考え、しなやかに生きられるよい時代になったと思う。

高天神城跡と新茶

森田重敏　（高二十一回卒）

掛川市には史跡は沢山あるが私の生まれた旧城東村では高天神城跡が最大・唯一の史跡である。母校である城東中学の校歌でも「小笠山脈裾を引く、高天神の城の跡・・」と歌われている。三月には例大祭が催され、行列が行われ、多くの店が出て賑わう。私は十八歳で郷里を出てしまったが、帰省すると時々高天神山に登り、眼下の集落や田

畑を眺め、仕事のストレスを忘れ、思いを新たにしたものである。

この高天神城を巡っては高天神城を制する者は遠州を制すると言われ、戦国時代に徳川氏と武田氏が壮絶な争奪戦を展開している。高天神城は今川義元が桶狭間で敗死した後、徳川家康の支配する城となった。甲州から遠州に進出した武田勢は何回か攻撃を仕掛け、天正二年（一五七四年）に武田勝頼が落とし、しばらく武田氏の支配にあった。その後、徳川家康が天正九年（一五八一年）に激しい戦いの後奪還している。この戦いに関しては、小説としては三戸岡道夫氏（掛川中学四十一回卒業。本名大貫満雄氏。元東京冀北会会長）の「秋風高天神城」や新田次郎氏の「武田勝頼」が大変面白く、史実に忠実に執筆されているように思う。

ところで地元の農協の遠州花咲農協の土方製茶工場ではだいぶ前から新茶を高天神城茶として売り出ししている。帰省した時は職場の皆にお土産としてお菓子を買い、配ったりしているが、五月の帰省時には必ずこの高天神城茶をお土産として買って帰り、一人一人に一缶ずつあげることにしている。小さな缶しか買わないが職場の職員が四十名にもなると、私にとってはそこそこの出費になる。しかし本当にささやかであるが、地元の産品を購入するのは地元に少しは役に立つのではと思っている。毎回配る中で「大変美味しかったので、直接購入したい」との声ももらい、大変嬉しく思い、農協の連絡先を知らせてやったりしている。

故郷では八十六歳の父が市内の特別養護老人ホームに入所しお世話になっており、月に一度は父に会いに帰省するようにしている。還暦を迎える年になったが、故郷への思いは老人ホームの職員を始め地元への感謝の念という形でより強くなっているように思う。まだまだ自分の生活で精一杯であり、なにもできないかもしれないが、余裕ができたら故郷へなにか貢献ができるか考えてみたいと思っている。

インターネット社会と同窓会

内田　金男　（高二十二回卒）

掛川を離れて早や三十年が過ぎ帰省する機会も少ない昨今、郷里の様子はほとんどわからないと思われるかもしれませんが近頃は違うのです。母校掛西のことも、掛川市のことも、また四季を通じての様々な催しの様子も、皆リアルタイムに知ることが出来るのです。

実際郷里に住んでいる兄弟や、知人からも驚かれるほど、私はインターネットのお陰で精通しているのです。五年、十年前には考えられなかったことです。　インターネット社会の情報量と速さというものは、これから更に拍車がかかるのであろう。

さて今年も十一月十日に、東京冀北会総会・懇親会が開催されますが、それに先立って七月初旬に開かれた東京冀北会の会合（幹事会）に初めて参加いたしました。これまで東京冀北会総会・懇親会に一度も参加することが無かった私が、この会合に出てみて、ほんのわずかな時間のコミュニケーションの場でありましたが、あらためて一方通行のネット情報と双方通行の情報の大きな違いを認識しました。

たまたまこのときは一番の若輩者が私でありましたが、先輩の方々の近況やお考えをお聴きしているうちに、けっして大袈裟でなく同窓の集う場の良さ・意義を感じました。今年こそは、東京冀北会総会には是非参加しようと思っています。

●東京冀北通信●

岡田　良雄　中二十四回卒
代筆　父は今年百歳になりました。元気にしております。

岡本　良夫　中二十九回卒
冀北会の情報が楽しみです。出席したいけど足、腰が銀座までは茅ヶ崎から行けません。

馬渕　俊郎　中三十五回卒
高齢のため夜の外出は控えています。冀北会発足以前を思い出す時新しい会の歩みを力強く感じます。益々のご盛会を祈ります。

岡本　甲子男　中三十八回卒
ライブコンサートは初めての企画楽しみにしています。

青木　昭成　中四十一回卒
施設に居りますので、一人での外出が許されません。

伊藤　太平　中四十一回卒
毎度ながら大変お世話になり感謝しています。元気のうちは出席したいと思っています。

白川　和則　中四十一回卒
健康状態は良好で、園芸、囲碁、読書の毎日です。読書は歴史物が好きで、ごく最近は井上靖の「天平の甍」や「後白河院」を読みました。

堀池　有　中四十一回卒
七月壊疽病院で預往、腰椎の手術。八月から山梨県石和にあるリハビリテーション病院にてリハビリ専念中。

大井　利作　中四十三回卒
いつもお世話になり深謝致します。おまけの八十台元気で過ごしています。盛会を期待します。

滝根　一秀　高二回卒
現在水戸市内の薬局に管理薬剤師として勤務しております。家内がパーキンソン病で行動歩行共に不自由のため私の手が常に必要、従って長時間私が家を空けることは不可能です。今回の盛会を祈ります。

内藤　芳男　高三回卒
毎年幹事、事務局の御尽力により東京冀北会が開催されることに心より感謝しております。今年も喜んで参加させて頂きます。

大橋　基宏　高七回卒
年齢相応に元気で居ります。「信・挙・書和台一如」を目指して、日々丹精、充実して居ります。

植田　正也　高八回卒
早稲田大学ビジネススクールでマーケティングの教鞭を取っています。生涯現役の全国運動を行っています。

佐野　角夫　高八回卒
政府関係の政策評価・独法評価、出資会社役員の仕事、並びに社団法人会長・財団役員等の公的業務を引き受けています。

大井　敏子　高九回卒
格別な今夏、事務局の皆様にはお世話になりまして有難うございます。どうぞご健康専一によろしくお願い申し上げます。

大石　愛祐　高九回卒
松戸市地元密着の生活をしています。変形性変腰椎症のため欠席します。日下リハビリ中です。

大草　賢司　高九回卒
体調不良のため欠席致します。来年は元気良く出席したいと思います。

高木　勇　高十回卒
健康第一をモットーに感謝の気持ちを忘れずに暮らしています。

村田　繁　高十回卒
現在、公立高崎経済大学硬式野球部（関甲新大学連盟所属）の監督をしています。

藤江　哲夫　高十二回卒
楽しみは同窓会、同級会、同期会に出席し、地元と遠州灘横須賀の祭に参加し、趣味に没頭することです。

逸見　伸夫　高十二回卒
自治会はじめ地域の活動が中心で気ままな生活をしております。出来るうちに出来ることを心掛けております。

天方　信久　高十六回卒
フィリピン人の若手技能者の日本国内での就業促進するサポートをしております。今後は土・日曜日開催を検討下さい。

朝比奈　豊　高十八回卒
今回は社業が重なり残念ながら出席出来ません。ご盛会を祈ります。

赤堀　実　高二十回卒
会には大変ご無沙汰で申し訳ありません。今回は受付をお手伝いさせて頂きます。

稲葉　正晴　高二十回卒
二〇一〇年三月定年退職しました。現在再就職活動中です。

武田　陽子　高二十同卒
加納堅志様のお歌楽しみです。

森田　重敏　高二十一回卒
八月に還暦を迎え、仕事も第二の職場（金融から不動産業）で働くことになりました。健康に気をつけ、しばらくは頑張りたいと思います。

市川　仁　高二十三回卒
お忙しいところご苦労様です。当日は仕事の関係で出席出来ませんが、今後もよろしくお願い致します。

高木　宣明　高二十九回卒
タイ駐在も四年過ぎました。来年は帰れるかと思っていますが？

永井　治宏　高三十二回卒
四年間大阪単身赴任を終えて、今年五月から千葉に戻っております。

木村　延崇　高四十四回卒
当地（長州萩）は空前の歴史ブームなのでしょう。来訪者が街にあふれております。

訃報

丸尾　武二　中二十六回卒
平成二十二年四月十五日　死去

兼子　千秋　中二十八回卒
平成十八年四月　死去

佐々井　典比古　中三十一回卒
平成二十一年三月二十一日　死去

大塚　潔一　中四十二回卒
平成二十二年六月二日　死去

河合　昭良　中四十二回卒
平成二十二年八月二十日　死去

藤江　誠司　高三回卒
平成二十一年一月十八日　死去

堀内　由男　高三回卒
平成二十一年八月二十九日　死去

鈴木　晶　高八回卒
平成二十一年十二月七日　死去

白瀧　豊　高八回卒
平成二十年一月十日　死去

太田　宣成　高十回卒
平成二十一年九月二十日　死去

西郷　俊司　高十一回卒
平成二十一年十一月二十七日　死去

中山　潔　高十四回卒
死亡日時不詳